

イエス・キリストの啓示 - 第十四回

第七の封印

Jeff Pippenger

2023-11-11

黙示録第十二章に描かれている、第三の天でルシファーに始まった天使たちの試練期の戦いは、第一の天で終わる人類と天使の試練期の戦いを象徴している。サタンとその天使たちが第三の天から投げ落とされたとき、サタンはエデンの園に新たな戦線を開いた。第三の天でのルシファーとの戦いにおいてそうであったように、神は人類にも猶予の期間を設けられた。間もなく到来する日曜法によって本格的に始まる第一の天での戦いは、人類にとっての猶予期間の終わりを表している。

黙示録第12章と第13章には、竜、獣、偽預言者が描かれている。通例、これら三つの勢力は、主としてそれぞれの過去の歴史を表していると理解されてきたが、ヨハネは「これから起こること」を書き記すよう命じられ、黙示録全体も「終わりの時」について語っているので、私たちは「終わりは初めによって示される」という聖書の原則を用い、黙示録の象徴を過去の真理ではなく現在の真理として適用している。

サタンは、第三の天で彼が始めた戦いにおいても、エデンの園で人間にもたらした最初の戦いにおいても、自らの戦いを遂行するために墮落したメッセージを伝える手段として「催眠術」を用いたとされている。

サタンはエデンで第一のアダムを誘惑し、アダムは敵と論じ合ってしまい、その結果、彼を優位に立たせてしまった。サタンはアダムとエバに対して催眠術の力を働かせ、この力をキリストに対しても行使しようとした。しかし、聖書の言葉が引用されると、サタンは自分に勝ち目がないことを悟った。

「男も女も、自分と関わる人々の心をとらえる方法の科学を学んではならない。これはサタンが教える科学である。私たちは、その類のものはすべて拒まなければならない。私たちは、メスメリズムや催眠術-元の地位を失い、天の法廷から追放された者の科学-に手を出してはならない。」 Mind, Character and Personality, 713.

サタンが教える「科学」はグローバリストの商人たちによって完成させられ、「終わりの時代」に「情報スーパーハイウェイ」を通して実行されている。サタンは偽りの父であり、メディアの巨大企業は虚偽を広めるだけでなく、真実をふるい落とし、彼らが異端と見なす者を追跡し、地球の歴史上かつてないほど洗練された催眠の手法を用いている。第三の天で始まった戦いは、第一の天での戦いが始まる時代に生きる忠実な者たちが、あらかじめ知ることによって前もって警告を受けられるよう、このサタンの戦い方の特質を強調している。ワールドワイドウェブと「情報スーパーハイウェイ」の制御中枢が米国で管理・統制されていることを理解するなら、米国が天から火を降らせて全世界を欺くとはどういう意味かが見えてくる。黙示録における「火」はメッセージを表している。

ヨハネの黙示録13章13節の象徴は、カルメル山での戦いに由来しており、そこではバアルの預言者たちと林の預言者たちは、バアルとアシュタロテが真の神々であることを確

認するために天から火を降らせることができなかつた。男神であるバアルと女神であるアシュタロテは、獣の像、すなわち教会と国家の不浄な結合を表している。彼らはイゼベルの預言者であり、イゼベルはアハブと不浄な関係にあった。カルメル山の物語における獣の像のこの二つの預言的証人は、アメリカ合衆国がまず国内で教皇制度の像を形作り、その後世界においてもそれを形作るという役割を示している。カルメルでの「火」は、真の神が誰であることを示す証拠となるはずであった。それは真の神を特定する天からの啓示を表しており、アメリカ合衆国が天から火を降らせるときにも同じ問題が存在する。

イザヤ書において、初めから終わりを告げる神は、いにしへのカルメル山のまさにその場面に言及し、さらに、アメリカ合衆国が天から火を降らせるときに示される預言的な状況にも言及している。

あなたがたの訴えを出せ、と主は言われる。あなたがたの力ある論拠を持ち出せ、とヤコブの王は言われる。彼らに持ち出させ、これから起こることをわれらに示させよ。先の事どもが何であったかを示させよ。われらがそれを心に留め、その結末を知るために。あるいは、これから起こる事どもをわれらに告げさせよ。後に来る事どもを示せ。それによって、あなたがたが神々であることをわれらが知るように。そうだ、善を行うか、悪を行うかしてみよ。われらが驚かされ、それを共に見られるように。見よ、あなたがたは無に等しく、あなたがたの働きも虚しい。あなたがたを選ぶ者は忌むべき者だ。わたしは北から一人を起し、彼は来る。日の出の方から彼はわたしの名を呼ぶであろう。彼は諸侯を漆喰のように踏みつけ、陶工が粘土を踏むように踏みにじる。初めから告げ知らせた者はだれか、われらが知るために。以前から宣言した者はだれか、われらが「彼は正しい」と言うために。まことに、示す者はなく、宣言する者もなく、あなたがたの言葉を聞く者もない。わたしがまずシオンに、「見よ、見よ、これらを」と言った。わたしはエルサレムに良い知らせをもたらす者を与える。イザヤ書 41:21-27。

まもなく到来する日曜法の施行によって始まる第一の天の戦いにおいて、アメリカ合衆国もサタン自身も、自らの「訴え」を「提示」することを許され、イゼベルの神こそ真の神であることを証明しようとして天から火を降らせるだろう。世界は、その神の礼拝の日のしるしを受け入れることを強いられる。天から降ろされ、「情報スーパーハイウェイ」を通じて全人類にもたらされるその火は「虚無」のわざであり、その媒体を通じて伝えられるメッセージを選ぶ者は「忌むべきもの」である。

その戦いにおいて、十四万四千人、そしてその後続く大群衆が、誰が真の神であるかという論争において神の証人となるだろう。戦いの両陣営から伝えられるメッセージは「火」として表される。すべての国々が、誰が真の神かを見極めるために集められ、「真理」を確立するために二つの種類の証人が立てられるだろう。

すべての国々を集め、諸民族を呼び集めよ。彼らのうち、誰がこれを告げ、昔の事柄をわれわれに示すことができるのか。彼らに証人を立てさせ、彼らが正しいとされるようにせよ。あるいは聞いて、「それは真理だ」と言わせよ。あなたがたはわたしの証人である、と主は言われる。わたしが選んだわたしのしもべもそうだ。これは、あなたがたがわたしを知り、わたしを信じ、わたしがそれであることを悟るためである。わたしの前に造られた神はなく、わたしの後にもいない。わたし、まさにわたしが主で

あり、わたしのほかに救い主はいない。あなたがたのうちに異邦の神がいなかったときに、わたしは告げ、救い、示した。だから、あなたがたはわたしの証人である、と主は言われる。わたしが神であることの。イザヤ書 43:9-12

カルメル山の最後の顕現には、サタンの側の証人と神の側の証人がいる。この出来事は、誰が真の神であることを示すためのものだが、神の忠実な証人たちは何を証しすべきなのか。

イスラエルの王である主、またその贖い主である万軍の主はこう言われる。わたしは初めであり、終わりである。わたしのほかに神はない。古の民を定めた時以来、だれがわたしのように呼び、告げ、わたしの前で順序立てて示せるか。これから来ること、後に起こることを、彼らに示してみよ。恐れるな。おののくな。わたしはその時からあなたに告げ、これを宣言してきたではないか。あなたがたこそ、わたしの証人である。わたしのほかに神があるか。いや、ほかにはない。わたしは一つも知らない。刻んだ像を造る者はみなむなしく、彼らの好むものも益にならない。彼ら自身がその証人であり、見もせず、知りもしない。それゆえ、彼らは恥をこうむる。イザヤ書 44:6-9。

カルメル山の最後の対決における信徒たちは、神が初めであり終わりであるという真理を証しする。彼は、「来たるべき事柄」を明らかにするために「昔の民を定め」た神である。神の証人たちは、カルメル山の最後の戦いの直前に封印が解かれるイエス・キリストの啓示を提示する。

サタンのカルメル山のメッセージは、天から下ってくる火として象徴されている。

そして彼は大いなる奇跡を行い、人々の目の前で天から地上に火を降らせる。（黙示録 13:13）

この聖句は、「情報スーパーハイウェイ」で人類に伝えられる催眠術という現代の科学を通じて、アメリカ合衆国が行う奇跡を述べている。しかし、この聖句はサタン自身がキリストを装って現れることについても語っている。

第三天使のメッセージの宣言に加わる天使は、その栄光によって全地を照らすであろう。ここには、世界的規模でこれまでにない力をもつ働きが予告されている。1840年から44年の再臨運動は、神の力の栄光に満ちた現れであった。第一天使のメッセージは世界のあらゆる宣教地にまで運ばれ、いくつかの国々では、16世紀の宗教改革以来いづれの地でも目撃されたことのないほどの宗教的関心が起こった。しかし、これらは、第三天使の最後の警告のもとで起こる力強い運動によって、なおいっそう凌駕されるだろう。

その働きはペンテコステの日の出来事と同様になるだろう。福音の始まりに、聖霊の注ぎによって尊い種が芽生えるために「初めの雨」が与えられたように、その終わりには収穫を成熟させるために「後の雨」が与えられる。「そうすれば、私たちは主を知ることを探求続けて、主を知るようになる。主の現れは暁のように確かで、主は雨のように、地に降る後の雨と初めの雨のように、私たちのところに来られる。」ホセア書 6:3。「シオンの子らよ、喜び楽しめ、あなたがたの神、主にあつて。主はあなたがたに初めの雨をほどよく与え、あなたがたのために、雨、初めの雨と後の雨を降らせてくださる。」ヨエル書 2:23。「終わりの日に、と神は言われる、わたしの霊をす

べての人に注ぐ。」、「そして、主の名を呼ぶ者はだれでも救われる。」使徒行伝 2:17、21.

福音の偉大な業は、その始まりを特徴づけた神の力の現れに劣るかたちで終わることではない。福音の始まりにおいて初雨の注ぎによって成就した預言は、その終わりにおいて後の雨によって再び成就する。これこそ、使徒ペテロが次のように言って待ち望んだ「さわやぎの時」である。「だから、悔い改めて神に立ち返れ。そうすれば、主の御前からさわやぎの時が来るとき、あなたがたの罪はぬぐい去られる。また、神はイエスを遣わされる。」使徒行伝 3:19、20.

神のしもべたちは、顔は光に満ち聖なる献身の輝きを帯び、天からのメッセージを宣べ伝えるために各地を駆け巡るだろう。地の至る所で、幾千もの声によってその警告が与えられる。奇跡が行われ、病人は癒され、しるしと不思議が信じる者たちに伴う。サタンもまた、偽りの不思議をもって働き、人々の目の前でさえ天から火を降らせる。ヨハネの黙示録13章13節。こうして、地に住む者たちは態度を決めるように迫られる。『大争闘』611、612.

サタンが天から火を降らせる時が来るとき、「地に住む人々はそれぞれの立場を取るよう迫られる」。その時、神の証人は「天からのメッセージを宣べ伝えるため、所から所へと急いで行く。幾千もの声によって、全地の至るところで警告が与えられる」。神の証人たちが成し遂げる働きは「ペンテコステの日のそれに類するものとなる」。その時には、「第三天使のメッセージの宣言に加わる天使が、その栄光によって全地を照らす」。ペンテコステにおいて、火は聖霊の注ぎのしるしであったが、火はまた、サタンの不浄の霊の注ぎのしるしでもある。

ヨハネが黙示録第7章で十四万四千人と大いなる群衆を示した後、彼は第七にして最後の封印が開かれることを示す。最後、すなわち第七の封印は、イエス・キリストの啓示の開封を表しており、また、恵みの時の終わりの直前に開かれることになっていた、黙示録の中の唯一の預言をも表している。第七の封印、七つの雷、そしてイエス・キリストの啓示は、いずれも同じ真理の象徴であり、その真理は恵みの時の終わりの直前に開かれる。イエス・キリストの啓示は、アルファでありオメガであるキリストの品性と創造の力を強調する。七つの雷は、十四万四千人が封印を受ける歴史を指し示し、第七の封印は、二人の証人がよみがえり、神の「真理」の創造の力を受けるその歴史の中で、聖霊の注ぎがあることを指し示す。そしてそれは、御父から御子へ、ガブリエルへ、預言者へと伝えられ、そこに含まれる力を読み、聞き、守ることを選ぶ者たちへと届けられる。

そして彼が第七の封印を解いたとき、天におよそ半時間の静寂があった。私は、神の御前に立っている七人の御使いを見た。そして彼らには七つのラツパが与えられた。また、もうひとりの御使いが来て祭壇のそばに立ち、金の香炉を持っていた。彼には多くの香が与えられ、すべての聖徒たちの祈りとともに、それを御座の前にある金の祭壇の上にささげるためであった。すると、その香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。そこで御使いはその香炉を取り、祭壇の火でそれを満たし、地に投げつけた。すると、もろもろの声と雷鳴と稲妻と地震とが起こった。黙示録 8:1-5.

聖句には、「七人の天使」が「七つのラッパ」を携えて「神の御前に立っていた」とある。これらの七つのラッパの天使は、慣例的に、日曜礼拝の強制に対するローマへの神の裁きを表すものと正しく理解されてきた。異教ローマはコンスタンティヌスのもとで321年に最初の日曜令を制定し、330年までにその帝国は東西に分割された。その時点から最初の四つのラッパが鳴り始め、それらは彼の帝国に対して差し向けられた歴史的な勢力を表していた。そしてそれらの勢力は476年までに、ローマの都を二度とローマ人の統治者を戴かない都市にしてしまった。そこはローマの力と栄光の象徴であった。教皇権が538年のオルレアン公会議で日曜令を可決したとき、第五と第六のラッパ、すなわち第一と第二の禍いとしても示され、イスラムを表すものとして、ムハンマドがローマ教会に裁きを下すために起こされた。これらのラッパに関する伝統的理解が正しいとしても、黙示録9章でそれらが提示されている箇所では、それらは「災い」と定義されている。

そして、これらの災いで殺されなかった人々の残りは、なお自分たちの手のわざを悔い改めず、悪霊どもや、金、銀、青銅、石、木の偶像（見ることも聞くことも歩くこともできないもの）を拜むことをやめなかった。彼らはまた、自分たちの殺人や魔術や淫行や盗みを悔い改めなかった。黙示録 9:20、21。

七つのラッパの完全かつ最終的な成就是、黙示録16章の「最後の七つの災い」である。黙示録9章の七つのラッパの預言的特徴をざっと見渡すだけでも、それらが「最後の七つの災い」と並行する特徴を備えていることがわかる。第七の封印が開かれるのは、恩恵期間がまさに終わろうとし、神の怒りが—「最後の七つの災い」によって表されるその怒りが—まさに注ぎ出されようとしている時代においてである。

「キリストが、ユダ族の獅子として『第七の封印を開いた』とき、ひとりの天使が黄金の香炉を手にして祭壇の前に立った。彼に多くの香が与えられ、それを御座の前にある金の祭壇の上で、すべての聖徒たちの祈りとともにささげるためであった。聖徒たちの祈りとともに立ちのぼる香の煙は、天使の手から神の前へと昇っていった。」五旬節における聖霊の注ぎに先立って、エルサレムに集まっていた信徒たちの一致した祈りがささげられた。

私たちの間に真の敬虔が復興することは、私たちのあらゆる必要の中で最大にして最も緊急である。これを求めることは、私たちの第一の務めでなければならない。主の祝福を得るためには熱心な努力が必要である。というのも、神が私たちに祝福をお与えになることを望んでおられないからではなく、私たちがそれを受け備えができていないからである。天の御父は、求める者に聖霊をお与えになることにおいて、地上の親が子どもに良いものを与えるよりも、いっそう進んでおられる。しかし、神が私たちにその祝福をお与えになると約束された条件を満たすことは、告白とへりくだりと悔い改め、そして切なる祈りによってなすべき私たちの務めである。復興は、祈りへの答えとしてのみ期待できる。『精選メッセージ』第1巻、121頁。

第七の封印が開かれることは、十四万四千人に印が押されることを指し示している。印が押されることは祈りによって始まるが、単に祈りという行為によってではなく、特定の祈りによってである。その特定の祈りはダニエル書で示されており、もちろんそれはまた黙示録でもある。

黙示録のヨハネとダニエル書のダニエルは、「終わりの時」における十四万四千人を表している。「終わりの時」には、第一の天における戦いのさなかに神の証人となる者たちが、猶予期間が閉じられる直前に封印が解かれる預言を証しする。これは、今私たちが考察している節において第七の封印として表されている。「金の香炉」を持つ御使いのもとに上る祈りは、ダニエル書第九章のダニエルの祈りによって表されている。その祈りは、「七つの時」の預言に関連してモーセが示した、特定の祈りである。その祈りは二重であり、ダニエルはその二重の祈りの文脈を、モーセの「のろい」と「誓い」という語で位置づけている。ダニエル書と黙示録は同一の書であり、ダニエル書にあるのと同じ預言の筋道が黙示録で取り上げられている。

黙示録18章の力強い御使いの働きにおいて聖なる火の注ぎをもたらす祈りは、「七つの時」に関するダニエルの祈りである。それは、ダニエルに預言を解き明かすために天から御使いガブリエルを下らせた祈りである。ダニエル書9章の最初の二十節にわたる彼の祈りの終わりに、ガブリエルは夕のささげ物の時ころに下って来た。金の香炉を持つ御使いが受け取る祈りは、太陽が沈みゆく「終わりの日々」の夕べに立ち上る祈りである。

私が語り、祈り、自分の罪と私の民イスラエルの罪を告白し、私の神の聖なる山のために、主なる私の神の御前に嘆願をささげていたとき、まさに私が祈りのうちに語っていると、初めの幻で見たあの人ガブリエルが、すみやかに飛んできて、夕の献げ物のところに私に触れた。ダニエル書 9:20、21。

ダニエルの祈りは、彼自身の罪だけでなく、神の民の罪も告白するものだった。彼の祈りは、レビ記26章の「七倍」に結びつく悔い改めの祈りの模範である。

あなたがたのうちに残された者は、あなたがたの敵の地で自分の不義のゆえにやせ衰え、またその父祖の不義のゆえにも、共にやせ衰えるであろう。もし彼らが、自分の不義と父祖の不義、すなわち彼らがわたしに対して犯した背き、またわたしに逆らって歩んだことを告白し、そして、わたしもまた彼らに逆らって歩み、彼らをその敵の地に連れ入れたことをも認め、そのとき、彼らの無割礼の心がへりくだり、自分の不義の刑罰を受け入れるなら、そのとき、わたしはヤコブとの契約を思い起こし、イサクとの契約をも、さらにアブラハムとの契約をも思い起こし、またその地を思い起こすであろう。レビ記 26:39-42。

モーセは、彼が神の「契約」の「争い」と呼ぶ「七つの時」に伴う罰を述べた後、神の民が、ダニエルがそうであったように、敵の地で自分たちが奴隷であることに気づいたときに何をすべきかを示している。彼らは、ダニエルが示したように、自分たちの罪を、そして父祖たちの罪も告白する必要があった。

十四万四千人として召された者たちがこの特定の祈りをささげると、金の香炉を持つ御使いは「香炉を取り、祭壇の火でそれを満たし、それを地に投げた。すると声と雷鳴と稲妻と地震が起こった」。米国とサタンが天から降らせる偽りの「火」のメッセージと対照をなす、「真理」のメッセージを表す聖なる火は、「日曜法」という「地震」の時に起こる。

ゼカリヤ書には、ダニエルが身を置いていた奴隷状態からの帰還後、神殿とエルサレムの再建の歴史において、ゼルバベルが神殿の礎石と頭石の両方を据えたと記されている。

すると彼は答えて私に言った。「これはゼルバベルへの主の言葉である。『勢いによらず、力によらず、わたしの霊によって』と万軍の主は言われる。『大いなる山よ、お前は何者か。ゼルバベルの前で平地となれ。彼は「恵みあれ、恵みあれ」と叫びながら、その頭石を運び出す。』さらに、主の言葉が私に臨んだ。『ゼルバベルの手がこの宮の基を据えた。その手がまたこれを完成させる。あなたは、万軍の主が私をあなたがたに遣わしたことを知る。小さなことの日をだれがさげすんだのか。彼らは喜び、ゼルバベルの手にある測り縄を、あの七つとともに見る。これらの七つは、全地を行きめぐる主の目である。』」ゼカリヤ書 4:6-10.

ゼルバベルは「バビロンの子孫」を意味し、第二の天使のメッセージの象徴である。そのメッセージは真夜中の叫びのメッセージと結び合わされると、アドベンチズムの初期の運動において「土台」を据えた。ゼルバベルはまた、「頭石」が据えられる時、アドベンチズムの終末期のFuture for Americaの運動における第二の天使のメッセージの繰り返しも象徴している。

世界は、「情報スーパーハイウェイ」という街路にある死んだ骨の谷で殺されていた二人の証人を見て、喜んだ。だがその二人の証人がよみがえらされたとき、世界は恐れ、天は喜んだ。預言者たちすべてと同様に、ゼカリヤは、神の民が喜ぶ「終わりの日々」を指し示している。ゼカリヤは、彼らが「その七つ」を見るとき、すなわち二人の証人の復活において喜ぶことを私たちに知らせている。「その七つ」は、レビ記二十六章で「七たび」と訳されているのと同じヘブライ語である。第一の天使の運動は、モーセの「七たび」の礎石を据えた。そしてその「真理」は、1863年に拒否されたにもかかわらず、第三の天使の運動の頂石ともなるはずである。

それが認められて成就し、しかるべき二重の祈りをもって実行に移されるなら、真の火は、ペンテコステのときのように、地に投じられるだろう。

次回の記事で、第七の封印の開封について引き続き取り上げます。